

今日の福音書は、イエス様が子どもの頃から育った故郷、ナザレに帰って、ユダヤ教の会堂で教えられた時のお話です。「ナザレで受け入れられない」という見出しがあるように、イエス様を故郷の人々は歓迎しない、イエス様にとっても、またナザレの人々にとっても、いい印象を受けない話でした。

福音書を読み終えた時、私が「主に感謝」と言い、会衆の皆さんも「主に感謝します。」と答えたのですが、このお話を聞いただけでは、とても「主に感謝します。」などとは言えない、幸せな気持ちにならない箇所です。それでも、何とか「主に感謝します。」と言えるように、この話から私たちは大切なことを学ばなければなりません。

さて、イエス様はどうして、ナザレの人々から受け入れられなかったのでしょうか。

イエス様は、安息日に会堂で教えられました。その内容は書かれていませんが、教えを聞いた人々は驚きます。しかし、「素晴らしい」と賛辞を述べたわけではありません。

『「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。』

このように書かれています。どうして人々はつまずいてしまったのでしょうか。

ここの人々の言葉の意味をどう考えるか。ある牧師さんは、このように言い換えています。

「この人はマリアの息子で、その兄弟姉妹たちも自分たちと一緒に住み、同じような生活をしている。しばらく見ないうちに、どこかよそへ行って、どこかのラビにでもついて勉強してきたのかもしれないが、それにしても権威あるもののように見えるが、自分たちと同じふつうの人間ではないか。奇跡を行なったということだが、それは何かの拍子に、身につけていた能力が少しあらわれただけのことではないか。」

イエス様の教えを会堂で聞いていた人は、イエス様の口を通して、メッセージを聴こう、というのではなく、「あいつは、外では評判らしいが、元々この町で育ったマリアの息子の、御用聞きのような、ただの大工ではないか。大した人物ではない」と納得するために、本人を見に来た、ということです。「どんなに才能を持っていても、元々この村で普通に育ったやつじゃないか。」というふうに、過去に戻って、その人を見るのであって、決して現在のイエス様をまともに見ようとはしていないのです。これが「つまずき」ということではないでしょうか。

最近の聖書は、「このように、人々はイエスにつまずいた。」というふうに訳しているものが大半なのですが、いくつか別の聖書を読みました。

原典のギリシャ語を直訳すれば「つまずいた。」ということになるのですが、その意味を明らかにしようとした、3つの新約聖書が出ていて、それを紹介します。

今から46年前、現在の新共同訳が出る前に、新約だけが「共同訳聖書」として出ています。そして、その1年後に、フランシスコ会訳の新約聖書も出ていて、このふたつがとても面白い訳をしているのです。そして、西南女学院の院長をしておられた、ウィリアム・マクスフィールド・ギャロット先生が監修された新約聖書が、25年前に角川新書から出ており、これもわかりやすいものです。

共同訳聖書『このように、人々はイエスを正しく理解しなかった。』

フランシスコ会訳『このように人々はイエズスを理解しようとしなかった。』

ギャロット監修は『このように、町の人々はイエスの権威を認めようとはしなかった。』

共同訳は、「人々にはイエスを理解する能力がなかった。」というニュアンスがあります。

フランシスコ会やギャロットのものは、「人々は、イエス（の権威）を理解し、認める気持ちがなかった。」という雰囲気です。

そしてフランシスコ会の訳には、聖書に注釈がついていて、

「郷里の人たちはイエズスの身内のことをあまりにもよく知っていたので、かえってつまずき、神の子としてのイエズスを認めることができなかった。」

このように説明しています。

わたしたちの心には、人をまともに理解できない、先入観というのがあるのではないのでしょうか。その先入観は、その人が過去に行ったこと。以前の仕事や生活ぶりで考えてしまって、現在の姿を正しく見ることができない、ということでしょう。これが、無意識的なら、共同訳の「人々はイエスを正しく理解しなかった」ということになるし、意識的なら、フランシスコ会訳の「人々はイエズスを理解しようとしなかった。」とか、ギャロット先生の、「町の人々はイエスの権威を認めようとはしなかった。」とかになるわけでしょう。

『イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。』

このように聖書には書かれていますが、これに似た言葉が、ギリシャの書物の中にあります。

「預言者は自分の故郷では受け入れられず、医者らは自分を知る人々に癒しを行なわない」

どうも人間には、自分と一緒に育った者とか、昔からの知り合いの預言者とか医者や、尊敬するのではなく、先入観を持ち、正しく評価しない傾向があることを語っているようです。それは目の前の現在のその人を理解するのではなく、昔の、過去の姿だけでその人を決めつけているからです。

しかし、私たちは、大工であったイエス様の言葉を真正面から受け取り、また天幕作りを仕事にしながら伝道したパウロの手紙を、決して割り引いて読むようなことはしていないと思います。

「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」ということは、それ以外の所では、預言者は、その語るまを、素直に受け取ってもらえるのだから、堂々と話さないというふうには、積極的に、伝道に向かわせている言葉、とも受け取れるのではないのでしょうか。

先週の福音書は、会堂長ヤイロの娘とイエス様の服に触れた女の話でした。信仰深い人がイエス様から癒される話ですが、それはイエス様に全幅の信頼を置いていることから奇跡が起こったのです。目の前のイエス様を神の子と理解できたからです。

この信仰深い人々は、イエス様がナザレの大工だったことなど、全く気にしていません。しかし、このナザレの人々は、イエス様に対しての信頼がない。昔の姿に振り回されて理解できないのです。

今日の福音書では、全く先週とは逆のことが語られています。

『そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。』

目の前の人の言うことを正しく理解しよう、という信頼がなければ、素晴らしいことは、決して自然に起こるのではない、ということを表しているのです。

2週間前、ヨブ記のことを話し、ヨブに不幸が訪れたのは、ヨブが悪いからでも、神様が意地悪をしたわけでもない。神様にもできないことがある、という話をしました。また、それと同時に、エクソダスという映画で、今までのモーセが紅海を二つに分ける場面では、ただ神様が奇跡を起こすのではなく、モーセが今までの経験から、引き潮になった時、海が浅くなり、向う側へ渡れる場所を見つけていて、人間の経験からの知恵が奇跡を起こしたことが表現されていました。

今日のナザレでの出来事。イエス様が働こうとしても、人々の先入観による疑いや不信が、それを妨げるということです。

さて、果たして現代において、同じことが起っていないか。牧師は本当に聖書に示された神様の意志を率直に語ろうとしているだろうか。説教を聞く人々は、その牧師のそれまでのこと、特に一緒に子どもの頃を過ごした人々は、牧師の言うことを真に受けることがなくなっていないか。牧師も信徒と仲間意識や昔からの親しさに甘えて、お互いに神様の働きのために、共に働く同労者という気持ちでみ言葉に向かっているか、それを問われているように思います。